

第14回全国市議会議長会研究フォーラム 第2部パネルディスカッション報告書

視察先	高知県高知市
日時	10月30日(水)午後2時40分～午後4時40分
場所	高知ちばさんセンター
テーマ	議会活性化のための船中八策
対応者 (講師)	コーディネーター 坪井ゆづる氏(朝日新聞論説委員) パネリスト 高部 正男氏(市町村職員中央研修所学長) 横田 響子氏(コラボラボ代表取締役/お茶の水女子大学客員准教授) 古田 康造氏(高松丸亀町商店街振興組合理事長) 田鍋 剛氏(高知市議会議長)
概 要	
<p>コーディネーター坪井氏と4名のパネリストにより、パネルディスカッションが行われた。</p> <p>(各パネリストの主要発言)</p> <p>1 高部 正男氏(市町村職員中央研修所学長)</p> <p>(1) 自治体議会について指摘される問題点</p> <p>① 投票率の低下 議会への無関心</p> <p>② 無投票当選の増加 議員のなり手不足</p> <p>③ 議員構成の偏り 女性、若者の参加</p> <p>④ 政務活動費の不正使用等 議員の不祥事</p> <p>(2) 議会基本条例の制定、議会報告会の開催</p> <p>① 議会基本条例の制定 60.8%</p> <p>② 議会報告会の開催 53.7%</p> <p>(3) 対応策(制度面の改革は国を動かす)</p> <p>① 選挙の統一実施(投票率向上のため)</p> <p>② 女性・若者がなりやすい労働環境の見直し 兼業規制の緩和、公務員からの立候補は辞職しなくてもいいように見直すなど</p> <p>③ 政策立案を強調し過ぎじゃないか→あまり強調しなくていいと考える</p> <p>④ 専門家を入れすぎ(公認会計士など) 平成29年から、議選監査員は監査員に入れなくてもよくなったが、議選監査員は必ず入れるべき</p> <p>⑤ 大選挙区は、区割りするべきじゃないか</p> <p>⑥ 女性議員はどんな人になるのか。議員の〇割が女性でないといけないという制度の制定、複数投票制の導入</p> <p>⑦ 議員の厚生年金への加入</p> <p>2 横田 響子氏(コラボラボ代表取締役/お茶の水女子大学客員准教授)</p> <p>(1) そもそも議会に必要なこと</p> <p>① 20年後の住民は幸せですか?(中長期視点での議論)</p>	

②やりっぱなしになってませんか・数字（EBPM）とともにPDCAは？
（データをもとに改革を立てよ）

③若手、女性の参加は？（多様性）巻き込んで街を活性化する策は？

(2) 議会改革の具体的なアイデア

① 中長期視点で街の目指す方向を議論 人口減を前提に
（未来カルテ（予測）で、自治体コードを入力）

② ガチンコ会議を多様な人材で実施
（住民との会話を作っていく、テレビ会議実施）

③ 経験の機会提供（土日夜間も活用、変わりダネを登用）

3 古田 康造氏（高松丸亀町商店街振興組合理事長）

(1) 問題点

① 議会報告会

なぜ来ないか。来ても来る人が固定化するのか。つまらないから…

② なぜなり手が少ないのか→議員は監視される

③ 報酬が少ない→しかるべき報酬は必要

④ そもそも、議会改革は必要なのか

(2) 対応策

① 議会（議員）から近くに寄ってくると…広報活動の充実
関心のある話を、みんなの前でやる。

② リスペクト（尊敬）される議員

③ 公費でお給料 しかるべき報酬

④ 特に問題がなければ、改革は必要ないのでは？

4 田鍋 剛氏（高知市議会議長）

(1) 主な議会改革の取り組み（平成以降）

① 委員会を原則公開に（平成6年3月）

② 市議会ホームページの開設（平成11年11月）

③ 市議会ホームページに会議録検索システムを追加（平成12年1月）

④ 本会議場傍聴席に車椅子用リフト・傍聴席を設置（平成14年3月）

⑤ 会議録検索システムに委員会記録を追加（平成16年4月）

⑥ 政務調査費の使途の透明性を高める条例改正（平成19年9月）

⑦ 「政務活動費の手引き」作成（平成20年4月）

⑧ 一般質問に一問一答方式を導入（平成21年6月から試行導入）

⑨ インターネットによる本会議定例会の録画配信を開始（平成25年7月）

⑩ 議会独自の行政評価を開始（平成26年4月）

⑪ 議会だよりのスマホ向けアプリ配信を開始（マチイロ）（平成27年6月）

⑫ 政務活動費の領収書など関係書類を議会ホームページで公開（平成29年9月）

⑬ 予算決算常任委員会を設置（平成30年9月）

(2) その他

- ① 議会だよりを発行
- ② 事業評価（行政評価）

5 坪井ゆづる氏（朝日新聞論説委員）

(1) 問題点

- ① 「自治主役」の自覚に欠ける議員が存在
- ② 「議会不信」が根強くあるのは否定しがたい事実
- ③ 選挙のたびに過去最低の投票率が相次ぐ冷ややかな視線

(2) 諸問題対応の視点

- ① 行政監視機能をどうやって高め、成果をあげていくか。
- ② 人口減少、外国人の増加、災害対応など、地域の将来を見すえた政策論議を進めるために必要な視点とは何か。
- ③ 候補者男女均等法のもとで、「老老男男」の実態をどう変えられるのか。
- ④ 規模の小さい議会で深刻化する「なり手不足問題」にどう対処するか。
- ⑤ 住民の関心を高めるには、何をなすべきか。

所 感

朝日新聞論説委員、坪井ゆづる氏の言葉には、残念で悔しい気持ちである。しかしながら、「自治主役」の自覚に欠ける議員が存在、「議会不信」が根強くあるのは否定しがたい事実、選挙のたびに過去最低の投票率が相次ぐ冷ややかな視線、議会が何をやっているかわからないけど別に困らないなど、世相を反映する愛のムチと受け止め、気を引き締めて行動していかなければならないとあらためて強く思った。

高部 正男氏の話では、自治体議会について指摘される問題点として、①投票率の低下、議会への無関心、②無投票当選の増加、議員のなり手不足、③議員構成の偏り、女性、若者の参加、④政務活動費の不正使用等、議員の不祥事が挙げられた。①については大野城市も投票率が低下しており、身につまされる問題だと思う。②は定数以上の立候補があるので特に問題なし。③は定数 20 名中 5 名が女性議員であり若い新人議員もおられ、また④は今のところ発生しておらず、大野城市議会は健全で良い市議会であると思うことができた。

田鍋 剛氏の岡山市議会の議会改革の中では、「議会だよりのスマホ向けアプリ配信を開始（マチイロ）」に興味を湧いた。これからも、大野城市議会の議会改革について考えていくとともに、先進地での取り組みを調査研究し、より活発で質の高い市議会を目指したいと思う。

—作成者 森 和也—

視察先	第14回全国市議会議長会研究フォーラム in 高知
日時	令和元年10月30日(水)・31日(木)
場所	高知ちばさんセンター
テーマ	議会活性化 「現代政治のマトリクス-リベラル保守という可能性」
対応者 (講師)	中島 岳志 氏 (東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授)

1. 政治のマトリクス

配分をめぐる軸としてのY軸、価値をめぐる軸としてのX軸

セーフティーネット強化(リスクの社会科)対自己責任(リスクの個人化)をY軸に配置しその事柄を確認してみる、同じようにX軸にてリベラル対パターナル(父権的な)を確認すると政治は2つの仕事をしているのではないか?

外交や安全保障の問題は含まない、内政面に絞れば、先ず「お金をめぐる仕事」

もう一つは「価値をめぐる仕事」、このお金の問題と価値の問題をめぐる、政治は内政面においては展開をしている。

リスクの社会化とリスクの個人化において政治行政の方向性が決定されている。

大きな政府や小さな政府の捉え方がこれである。

もう一方の価値の問題は「リベラル」片方に「パターナル」を置いて考えてみると、近代のリベラルの起源はヨーロッパの30年戦争が、1600年代の前半で日本が江戸時代の初期位でヨーロッパ全体を巻き込んだ大きな戦争であった。

この戦争は複雑な戦争であったが宗教的な対立から結果、結論が出ず、1648年にウエストファリア条約の締結においてヨーロッパ人がみんなで共有していたのが、この「リベラル」という考え方であった。

元々寛容という意味からスタートして、自分と価値観が違う、思想信条が異なる、そういう他者と全面的な戦争をしても結論がつかないという教訓を得て、思想や信条が異なっても相手に寛容になることをお互いに確認することが出来た。トレランス(tolerance)という英語にあたる寛容としてのリベラルが近代的な発祥といえる。

寛容としてのリベラルは自由という概念に発展し、自由主義という近代的な一つの重要な枠組みになります。

リベラル対保守というふうに言われるがリベラルの対抗概念は保守ではないのではないのか。

リベラルの反対語は英語では「パターナル」という概念になるのでは、日本語を充てると「父権的」と訳し、父の権利のことです。つまり強い権限や力を持っている人間が価値の在り方について介入し選択をしていくパターナリズムとなる。

現在の安部内閣も様々な形でのパターナルなタイプと言えるし、政府の規模では最近では幼稚園、保育園の無償化など、むしろ多くのお金をだしてリスクの社会化を進めようとしているが、租税負担率、GDPに占める国家支出の割合や公務員数などの3つの数値を国際比較すると、指折りの「小さな政府」となります。

自民党の政治がその時代において変容をしている。

60年代後半から70年頭にかけて「保守の危機」という言葉を使い危機意識を持っていた。

自民党が強かったのが地方でしたが人口が都市部へ流入し、地元のこれまでのある種のネットワークから切れて都市労働者となり、革新勢力となっている。

1968年に東京では美濃部さんの革新都政、京都も革新自治体との誕生など。

次に田中角栄と大平正芳の平成研と宏池会の動きとなり、70年代の保守の危機に強うい基盤を安定させた、この2つのライン平成研と宏池会が基本的に日本政治では保守本流と言うが現在の自民党が必ずしも自民党が考えてきた戦後50年、長きにわたって築いた保守本流の中核にあるか？

むしろ時代から見ると少しずれて来ているのではないか？ そして「官から民」への流れを作った中曽根内閣、小泉内閣で自民党は一気にリスクの個人化を進め、「官から民へ」「規制緩和」「構造改革」そして「マーケット主義」へと進んでいく。

こういう形で自民党は大きな推移をして来ている。

「自民党一回転論」と言っているが、自民党は大きな変化を時代の中で遂げて来ている。

その間の野党というと、現在、自民党政権の軸足に対し、もう一つの選択肢を提示するならば、かつての宏池会が担っていたラインだと思う。そんな中野党は色々と揺れ動いて定まりません。

価値の問題については極めてリベラルな考え方を提示しているのではないか。

斜めと組むと何をやりたい政治なのか、政党なのか分からなくなってしまう。

世界中で80年代以降、いわゆる新自由主義が席卷、「官から民へ」です。

政治の領域をし伊作して、マーケット、市場に任せていくという、基本的に新自由主義の考え方です、つまり、政治のやっている仕事の量が小さくなっていく、政治的なものの在り方が縮小し、政治家の仕事がどんどん小さくなっていく。

これがつまり小選挙区制となり二大政党制となる。

二大政党制がこの新自由主義に入っていくと政治の領域が小さくなり、二大政党の内容が極めて似てきて、小選挙区制をやると少数者の意見を耳を傾けないようになり二大政党が意見が似てきます。そして投票率が下がっていきました。

2. ラディカルデモクラシーとポピュリズム

主権者が主権から疎外されていると思い始め、民主主義の危機の中、投票にも行かなくなってしまうという現象が起き、それに対してもう一度この民主制を立て直さないといけないというのが政治学での議論があったラディカルデモクラシー論である。

一票だけではなく、別の政治のかかわり方、直接的なかかわり方があるのではないかと議論である。

ラディカルデモクラシーには「熟議デモクラシー人々が公的なものに出てきて、そこで話し合い、そしてその意見が具体的な政治に反映される在り方、特に地方政治に見られる在り方がそうであるデモクラシーと「闘技デモクラシー」基本的に重要なのは政治というものは対抗軸であること。

明確な対抗軸を見せ、真っ向から挑んでいく姿を見せること。そして、その延長線上に

ある政治は政治家のものではなく、主権者のものであるという「ポピュリズム」という政治を人民によこせという、異議申し立てと言われている。

3. 保守とは何か？

保守というのは政治学においては、しっかりと定義づけをして使うことになっていて、保守というのは反動ではない、何も変えないのが保守ではありません。

大切なものを守るには変わっていかなくてはなりません。

「保守するための改革」しかし、その方法は一気に変えるのではなく一步一步づつやっていくグラジュアルな改革、保守する改革です。

保守のエッセンスは「永遠の微調整」といえ、人間の力によってある種の理想社会を革命で作ることは不可能であり、それより長い歴史の英知に従いグラジュアルに永遠の微調整をやっていくことが重要である。

保守はリベラルという考え方に接近していく。

基本的に保守の中心にあるのは、懐疑的な人間観であり、人間は間違いやすい動物で、理性は間違わないものではないという考え方である。

自分たちは間違いやすいので他者の意見を聞きながら合意形成をしていくという自由を尊びリベラルを尊重する。

保守本流、保守思想というもののエッセンスを考えるならば必然的にリベラルという概念に行きつくと思われる。

リベラルと保守とがタッグを組んだ時にもう一つの重要な選択肢が生まれるのではと考える。

所 感

実際の歴史上の政治状況を題材として論を構成されている。

現実的に政治の姿を最後にまとめられたが、保守の在り方の重要な内容の提示がなされ、地方自治において参画しているものとして肝に銘じて、他者の意見を聞きつつ合意形成を図ることに努めたいもの考えている。

視察報告書

視察先	第14回全国市議会議長会研究フォーラム in 高知
日時	10月31日(木)11時30分～17時15分
場所	視察先(桂浜・高知県立坂本龍馬記念館・高知市立自由民権記念館)
テーマ	土佐の自由民権運動と歴史・文化を活用した観光振興事例視察
概要	<p>明治維新の礎を築いた幕末の志士「坂本龍馬」、そして維新後、「自由は土佐の山間より」といわれる自由民権運動の発祥の地であり、自由と平等の精神を培った歴史や想いととも、地域の文化を学ぶ取り組みを視察する。</p> <p>(1)桂浜</p> <p>太平洋に面した雄大な景勝地であり、一帯が都市公園として整備が進められており、観光地として散策するに最適であり坂本龍馬記念館、桂浜水族館、国民宿舎桂浜荘等も公園内に建っている。</p> <p>天候は秋晴れの穏やかな中、松林に囲まれた丘にそびえる巨大な坂本龍馬の銅像は、袴にブーツ姿、懐手で太平洋を眺めている姿は壮大であり、この日本の行く末を案じ、今一度洗濯しようと言う壮大な思いと決意を表しているようである。たまたま、工事中であり有料で仮設の階段で登り、顔の高さから太平洋を見渡すことができ、感慨無量。</p> <p>この坂本龍馬像は、龍馬の功績を後世まで伝えようと、高知県の青年達が全国で募金運動を展開し、昭和3年に建立された。</p> <p>(2)高知県立坂本龍馬記念館</p> <p>坂本龍馬の様々な資料が揃う「龍馬の殿堂」。映像や音声を効果的に用いた体験型展示の本館と、本格的な博物館機能を備えた新館の2館体制で、龍馬をさらに深く知ることができる施設。</p> <p>この日、特別展「維新十傑—創造・行動・志—」が開催されていた。</p> <p>西郷隆盛や木戸孝允ら「維新十傑」と呼ばれる10人が紹介されていた。</p> <p>また、京都国立博物館に所蔵されている、国指定の重要文化財とされている龍馬の様々な書簡や手紙、ゆかりの刀5振りも展示されていた。非常に貴重な文化財を見ることができ、坂本龍馬の人物像を垣間見ることができた。</p> <p>(3)高知市立自由民権記念館</p> <p>高知市は、市制100周年を記念し、新たな100年へのシンボル施設として、自由民権運動を中心に土佐の近代に関する資料を広く収集・保管・展示して、次の世代に引き継いで行くために、自由民権記念館が建設された。</p> <p>明治維新という新しい時代に、この日本をどのような国にすべきかを考え、明治政府の目指す方向とは違う道を構想し、「明治の第2の改革」自由民権運動を起こした。それは、憲法を作り国会を開こう、言論や集会が自由な世の中にしようと彼らは訴え、運動は全国に広がり、日本で最初の国民的な民主主義運動になった。</p> <p>板垣退助をはじめ、「自由は土佐の山間より」といわれるように、近代日本の歴史に大</p>

きな役割を果たした土佐の自由民権運動で、日本最初の民主主義運動にかけた、土佐の先人達の熱い思いが展示されていた。

所感

今回、「土佐の自由民権運動と歴史・文化を活用した観光振興事例」として、明治維新の礎を築いた幕末の志士「坂本龍馬」、そして維新後「自由は土佐の山間より」といわれる自由民権運動の発祥の地であり、自由と平等の精神を培った歴史や想いととも、地域の文化を学ぶ取り組みを視察した。

幕末から明治維新への日本の激動期に、大政奉還へと大きな役割を果たした坂本龍馬と維新後の自由と平等の精神を培った板垣退助をはじめとした自由民権運動について、今一度詳しく学ぶことができた。この土佐から、国の行く末を案じ、気宇壮大な思いで強い熱意と命をかけた行動に、唯々感嘆と尊敬の念を禁じ得ない。

それを、地元の人々は誇りに思うとともに、その先人達の想いと功績を後世まで伝えようと、「坂本龍馬像」を建立したり、「高知県立坂本龍馬記念館」や「高知市立自由民権記念館」等を建設し、観光としても活かしている。

大野城市においても、「大野城心のふるさと館」を開館し、水城・大野城・須恵器等を中心に郷土の歴史・文化を紹介・展示している。

今後は、それ以外の知られていない郷土の歴史の発掘と共に、九州国立博物館、周辺市町の歴史資料館や九州大学、韓国等との連携による研究や展示等による歴史・文化の向上と共に、観光振興にも活かす必要があるように思う。

—作成 田中健一 —